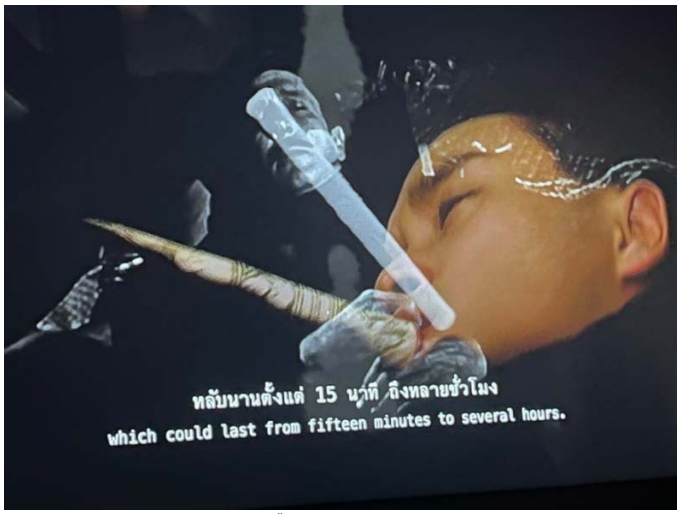
AIT & バッカーズファンデーション アーティスト・キュレーター支援プログラム
リサーチ報告書

黒沢聖覇

目的:
東南アジアの現代美術のシーン及び「グローバル・サウス」としてのアジアにおける文化機関のありかたの調査

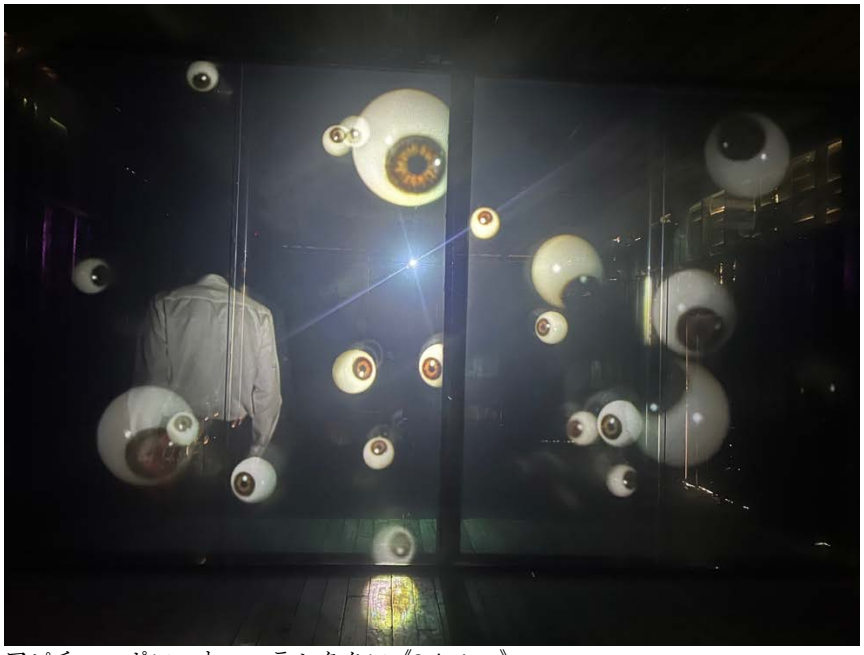
内容:
4/28-4/30 タイランドビエンナーレ・チェンライ 2023 視察

報告者が第 2 回の共同キュレーターを務めたビエンナーレの第 3 回エディションの視察。タイ文化省の現代美術部門である OCAC 主催により、毎年開催都市を変える本ビエンナーレは、美術館等のインスティテューションが少ないタイ国内において、主にサイトスペシフィック型のコミッション作品を中心として、それぞれの開催地域特有の文化を取り込みつつ、各都市での現代美術文化振興を図ろうとするものである。外国人ディレクターが務めた初回と第 2 回とは異なり、本エディションは今日のタイ現代美術の立役者ともいえるアーティストのリクリット・ティラヴァニとジム・トンプソンアートセンターのディレクター等を務め、開催都市チェンライの出身でもある グリッティヤ・ガウェウォンの 2 人が務めている。タイアート界で重要な影響力を持つ 2 人がディレクターとなったことで、本ビエンナーレは現代美術に疎いタイ来場者層を取り込みつつ国際的な芸術祭のスタンダードを保持する双方の点に成功していたと言える。特に、開催都市のタイ最北であるチェンライは、ラオスやミャンマーと国境を接しており、「ゴールデントライアングル（黄金の三角地帯)」と呼ばれるメコン川を介した山岳地域が会場に含まれている。このゴールデントライアングルでは歴史的にアヘンの原料となるケシが栽培されており、麻薬密売地帯として富を得てきたという負の側面を持つが、そこには近代における世界的な植民地主義とのグローバルな関係性が見いだせる。ホー・ツー・ニェンなどの著名作家がそうした観点に着目し作品を展示しているのも印象的であった。またこの地域には首長族として著名なカレン族など多くの先住民族が暮らしており、そうした先住民のルーツを持つアーティストによる作品展示が意図的になされていることも本エディションの特徴といえる。




(左)ホー・ツー・ニェン《The Critical Dictionary of Southeast Asia: O for Opium》2022
(右)モン族の作家 Tseu Siong によるインスタレーションと報告者

また、アピチャッポン・ウィーラセタクンによる古い木造の学校を利用したインスタレーションは、映画的文脈とタイ地域特有の幽霊文化を織り交ぜ、会場をうまく利用しながら、同時にタイの密林にて逃走した共産党員の歴史を暗示するなど、複数の観点を示しつつ「目」とスクリーンの関係を構造的に援用した大変な良作であった。



アピチャッポン・ウィーラセタクン《Solarium》

その他、多くのタイ作家とグローバルアーティストをバランスよく織り交ぜつつ、Open World というシンプルなタイトルによって多くの解釈の余地を残し、難解すぎるコンセプトを提示しないことで、一般来場者層の獲得に成功していたと言える。また、芸術祭最終日の視察となり、ディレクターの２人や日本から訪れていた片岡真実氏や参加作家であるホーツーニェンやシマブク氏らとも夕食をともにし、意見交換をできたのは幸いだった。

5/1-2 チェンマイ視察





（左）MAIIAM オーナーエリック氏のコレクションのプライベート倉庫にて、ミット・ジャイ・インやスタッフらと。
（右）ミット・ジャイ・インのスタジオにて。

短い時間であったが、バンコクと同様に重要なアートシーンを持つチェンマイを視察した。私設の現代美術館である MAIIAM では、展示替え期間中だったものの同館キュレーターの Kittima Chareeprasit 氏に館を案内いただいた。また、新しいギャラリーである Jinjai Gallery や、チェンマイ在住の作家のナヴィン・ラワンチャイクンのスタジオやあいち国際芸術祭 2022 の参加アーティストでもあるミット・ジャイ・イン氏のスタジオを訪問し、昼食をともにさせていただいた。ナヴィン・ラワンチャイクンの StudiOK も訪問し、タイ現代美術の父とも言えるモンティエン・ブーンマの過去作品のオマージュを捧げるインスタレーションを制作していた。





（左）ナヴィン・ラワンチャイクンによるモンティエンブーンマのオマージュ作品
（右）ナヴィン・ラワンチャイクンのスタジオの前で。

5/3-5 バンコク視察



タイ現代美術の父、モンティエン・ブーンマのアーカイブにて、一人息子のバンク氏と。

バンコクのアートシーンの視察。訪問先の数が多いため紙幅の関係で割愛するが、多数のバンコクのアートスペースや展覧会、作家スタジオビジット、タイ現代美術の父であるモンティエン・ブーンマのアーカイブの視察等を行った。バンコク郊外にあるモンティエン・ブーンマのアトリエは息子のバンク氏が引き継いで 40 代で早逝した作家の貴重なアーカイブ等を残しており、90 年代の日本での活躍等の資料も残されていた。

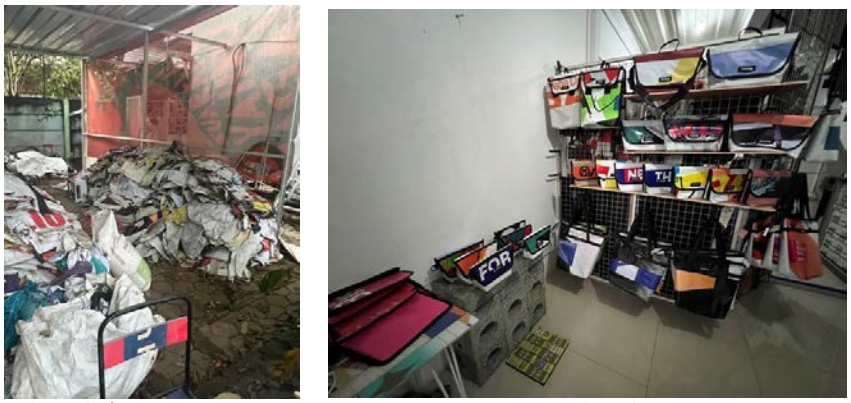
5/5-5/8 ジャカルタアートシーン視察

インドネシア・ジャカルタのアートシーンを視察。訪問箇所多数のためすべてを掲載できないが、前回のドクメンタのディレクターを務めたアーティストコレクティブのルアンルパが支援するアートセンター兼レジデンシー「Gudskul」（良い学校 Good School の意）の視察などをおこなった。Gudskul は、捨てられたコンテナ等を利用することで、展示スペース、ライブラリ、食堂、レジデンシー、ショップ、ラジオ局、オーディトリアム、アートハンドラーのスタジオまで数多くのアート機能を持つ複合施設を生み出し、全てが運営者たちによる自作インドネシア流の DIY の精神で作られている特異なスペースである。



（左）Gudskul 外観
（右）コンテナ等を利用したスペースとリヤカー式 DJ ブース

地域住民にも広く開かれており、定期的に教育プログラムなども行うことで、文化機関の少ないインドネシアにて独自のアートシーンを切り開いている。「Gudskul」としてドクメンタにも参加し、日本でも多くのオルタナティブスペースと連携するなど、国際的な注目度も高い。また併設される工房では、インドネシアで問題となるプラスチックゴミを溶かし、アーティストたちがアップサイクルを行った製品の販売も行っているなど、環境の問題にも取り組んでいる。
その他、複数の作家紹介を受け、多くのスタジオビジットやアーティストインレジデンシーの視察を行った。



大量に廃棄されたビニール製バナーとアップサイクル後の製品

成果と今後の計画:

このリサーチでは、歴史的な欧米主導の美術のコンテクストが転換しつつある昨今において、経済面から取り沙汰されることの多い「グローバル・サウスのなかのアジア」という観点に着目し、そこでのアートシーンの生態系が、欧米や日本のそれとどのように異なり、あるいはどのように重なるかについて知ることが目的であった。今回の調査で特に浮き彫りになったのは、西洋近代に依拠するミュージアムの制度や現代美術の支える文化機関がいまだ希薄といえる東南アジアにおいて、民間、商業画廊、オルタナティブスペース、個人コレクターといった様々なステークホルダーが垣根なく交流しながらアートシーンを駆動させていることである。タイでは主にマーケットに牽引される形で現代美術シーンの勢いは凄まじく、ギャラリーオープニング等ではアート関係者が一斉に集まり、議論を交わしつつパーティーを楽しむなど熱気を持つように見受けられた。それぞれの立ち位置を超えすべての関係者が繋がっていることにより、当初予定していなかったスタジオビジットや調査も可能になったことには感謝したい。とりわけ 90 年代の日本がそうであったのだろうと想起させられるような現代美術シーンの興隆を感じることができた。インドネシアでは広義のアートインフラという意味では、タイよりさらに脆弱なように見受けられるが、それゆえに生じるコレクティブの精神や独自の連帯の仕組みが散見され、美術館では成立し難い地域性や教育のあり方、知の共有など、彼らの DIY 精神から多くを学ぶことができた。総じて、「生活」と「制作」が密接に結びついているがゆえにおこる独自の脱中心的なスペース運営が、ジャカルタのアートシーンを支えるインフラストラクチャーとなっているようにも見える。そこには行き当たりばったり的なブリコラージュの技術、即興性も散見されるが、業界があまりに複雑化し概観することが困難になった日本とは異なり、この 10 年の大きな経済成長とともなって一体感のある新しいうねりとグローバルな可能性を感じさせられた。同時に、タイやインドネシアの文化シーンの形成は、日本の外交政策や経済戦略と両輪でもある。私自身無自覚であった日本による東南アジアへの文化輸出は、作家との議論で指摘されることになった。

加えて、東南アジアという地域をひと括りにすることはできず、むしろあまりにも多様な文化が混在していることに独自性があるといえるが、あえて特筆するならば近代社会ではあまり感じることのない地域に根ざしたスピリチュアリティや宗教性が両国の現代美術の制作に通底していることは興味深い。日本の現代社会のようにスピリチュアリティが資本主義社会の中で疎外化・形骸化されることなく、作品制作や環境意識と率直に結びつくことで、モンティエン・ブーンマに代表される独自の系譜が形成されているように感じた。

先月 11 月に開催された ATAMI ART GRANT 2024 という芸術祭内の報告者によるシャーマニズムをテーマにしたキュレーション企画にて、本リサーチでスタジオビジットしたジャカルタ拠点の作家モニカ・ハプサリを招聘し、作品展示やパフォーマンス、学術的観点をもった公開ラウンドテーブルを開催するなど、このリサーチで得たスピリチュアリティについての知見を展覧会実践に反映した。

現在、報告者が参加するアジアの若手・中堅キュレーターを呼び集める文化庁主催の国際ラウンドテーブルにて、このスピリチュアリティについての議論を深め、来年度以降、上映企画やシンポジウムなどの構想を練っている。また、この東南アジアの独自性と東アジアの感覚の連なりの中間の地域として報告者がアートセンター設立プロジェクトに関わる沖縄地域の調査も継続して行っていこうと考えている。あらためて、この貴重なリサーチ機会を提供してくださった AIT とバッカーズファウンデーションの皆様に、心より感謝申し上げたい。